

武家名目抄稿

術藝部一

一

和書門類	二五二〇六號	一〇七函	四四九冊
------	--------	------	------

和書類	二五二〇六號	四〇六冊	一五三函
-----	--------	------	------

内閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457 (409)
函號	153 275



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





武家名目抄稿第一冊

術藝部一目錄

兵法 今无

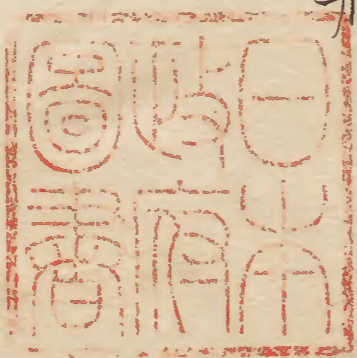
軍法 今无

軍配 今无

採配 今无

武藝 今无

武藝四門 今无



射藝 今无

弓法 今无

弓箭ノ藝 今无

弓箭ノ道 今无

騎射 今无

流鏑馬

定役流鏑馬 今无

百番流鏑馬 今无



万度流鏑馬 今无

三的 今无

馳射追物 今无

牛追物 今无

犬追物 今无 犬追物繪圖一巻別あり

御手組ノ犬追物 今无

式ノ御手組 今无

白磨ノ犬 今无

千足犬追物 今无

闖犬追物 今无

笠懸

遠笠懸 今无

式ノ笠懸 今无

小笠懸 今无

闖笠懸 今无

千番笠懸 今无

諏訪ノ笠懸 今无

連ルノ笠懸 今无

射流ノ笠懸 今无

三物 今无

五物 今无

武家名目抄稿第一冊

術藝部一

流鏑馬

續世継物語云のかりかひ鳥羽とて白河院のや

ふさあといふ事侍らんいらふたきにはふ

うしとらいふのいんいらふあまて

ほそまのいあふあるいあまのいまいま

るらいゆいといふいらいふいといふいと

うとのりふあはれせしむるよふらうて  
やうきしととくを記しひり続を二  
條に伸をり兼うやまあしんよ公葉の由を  
たてんあはせなる入ふ事うをいそは  
分

平治物語之熊也ふまの人多しふりしむる  
うまはをいひのたふまふものまういぬの  
加治谷はあまのよとむらりのまのまはれ

よふたひけつまうこひのやまあをたせ  
はううそのせいせんまうく同廿九の巻ま  
斗ふしゆあくふまうくひきまう

高倉院嚴鴻作幸純云治承四年四月あるる  
の時了福原よつを記しひりま一日を記しと  
うそよ下心乃うちまぬひりりゆく東の中境  
せんして作樂まうあうしこ作幸ありあ  
多しんうりものいそまてあきうけやま

おなとほうまつ〜を〜以後をすす〜  
ますか〜ふ云〜は流とわ〜せ  
まこれひん〜ま〜と〜やろ  
お〜ま〜に八月あるおれ〜  
あま〜ひ〜あ〜の〜あ〜ま〜  
目如及〜法舎れを〜中社〜  
希樂〜ん〜か〜ら〜ぬ〜あ〜を  
あ〜あ〜の〜あ〜あ〜あ〜あ〜

日よとま〜あ〜の本也〜  
くつ〜あ〜て〜あ〜のま〜あ〜  
片〜あ〜軍れ〜あ〜あ〜あ〜  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

吾妻鏡云文治三年八月四日壬申今年於  
鶴岡依可被始行放生會被充催流鏑馬射  
手元的立等役其人數以熊谷二郎直實可  
立上手的之由被仰之处直實合鬱憤申云

御家人者皆傍輩也而射手者騎馬的立役  
人者步行也既似分勝負於如此豈者真實  
難從嚴命者重仰云如此所役者尋其身器  
立流鏑馬的畢思其濫觴詵猶越射手之所  
役也早可勤仕者直實遂以不能進奉之間  
依其科可被召所領之旨被仰下云々十五  
日癸未鶴岡放生會也二品御出有流鏑馬  
射手五騎各先渡馬場次各射訖皆莫不中

的其後有玆事諏方大夫盛澄者流鏑馬之  
藝窮依慣傳秀鄉朝臣秘訣也爰屬平家多  
年在京連々交城南寺流鏑馬以下射藝訖  
仍參向関東事頗延引之間二品有御氣色  
日来為囚人也而被断罪者流鏑馬一流永  
可陵廢間賢慮思食煩涉旬月之處今日俄  
被召出之被仰可射流鏑馬之由盛澄申領  
狀召賜御厩第一惡馬盛澄欲令騎之刻御



厩舎人密々告盛澄云此御馬於的前必馳  
于右方也云々則於一的前寄于右方盛澄  
為生得達者押直弓射之始終無相違云々  
今日流鏑馬一番射手長江太郎義景的立  
野三刑部丞成綱二番射手伊沢五郎信光  
的立河勾七郎政頼三番射手下河辺庄司  
行平的立勅使河原後三郎有直四番射手  
小山千法師丸的立浅羽小三郎行光五番

射手三浦平六義村的立横地太郎長重

四年二月廿八日甲午鶴岡宮被始行臨時

祭二品御出小山七郎朝光持御劔着御回

廊之後有流鏑馬二騎

幸氏  
盛澄

射之馬長三騎

渡馬場遠近御家人為宮勤此會群集云々

又云建久四年八月九日癸卯將軍家令出

由比浦給是所被召具來放生會流鏑馬射  
手也各被試其射藝北條五郎時連始從此

役令下河辺庄司行平訓其體給而就弓持  
様武田兵衛尉有義海野小太郎幸氏等有  
申子細事行平述譜第口傳故実等將軍令  
甘心彼儀給上勿論也

又云嘉禎三年七月十九日甲午北條五郎  
時頼始可被射来月放生會流鏑馬之間此  
初於鶴岡馬場有其儀今日武州為扶持之  
被出流鏑馬屋駿河前司以下宿老等參集

于時招海野左衛門尉幸氏被談子細是旧  
旁之上幕下將軍御代為八人射手之内欵  
故実之堪能被知人之故欵仍見射藝之失  
礼可加諷諫之旨武州被示之射手之躰尤  
神妙凡為生得堪能由幸氏感申之武州猶  
令其失給繹及再三幸氏愁申云挾箭之時  
弓一文字令持給事雖非無其說於故右大  
將家御前被凝弓箭談議之時一文字弓持

事諸人一同儀欤然而佐藤兵衛尉憲清入  
道行云弓拳引押立可引之樣可持也流鏑  
馬矢ヲ挾之時一文字ニ持事無礼也者倩  
案此事殊勝也一文字ハテ誠ニ引ヲ引テ即  
可射之躰ハ不見聊遲姿也上ヲ少キ揚テ  
水走ニ可持之由被仰下之間下河邊行工  
藤景兩庄司和田巖望月重藤澤清等三金  
吾荒諷方大夫盛愛甲三郎隆等頗甘心各

不及異議承知訖然者是計ヲ可被直欤者  
義村云此事ヲ令聞此說思出訖正觸耳事  
候キ面白候ト云々武州亦入真弓持樣向  
後可用此說云云

又云文永二年八月十六日辛巳將軍家為  
覽馬場儀密入御于相州御棧敷中流鏑馬  
第三番射手二三的不中競馬勝負宮寺可  
定申之由左京兆被計申之



若又馬をくまらるひする所の自然の姿あり  
流彌馬可仕也信出よれば三的と先可射也ゆ  
ゆきの法とを信武の根よまきくくまの甲  
の方よふ法ひくさひる色ゆのけとま  
とくは流彌も乃所の事あり於岡東八幡ま  
頼朝所代神幸射子次事二月初卯十言流  
月四言流五月五日十言騎六月十日十言騎  
八月十日十言騎九月九日十言流十月十言流十

一月七騎

笠懸

中右記云寛治六年二月八日辰時許於加  
波多河原暫留御馬前駈皆下自馬候左右  
是為御覽射藝義細朝臣也一々騎馬渡之  
仰可射笠懸之由武士中能射者一人為射  
笠懸又渡南形容甚美顔色不変万人感之  
次立的之後射之已中的中心傳養由藝見

者如堵墻上下莫不感賀彼問武士名兼貞

今昔物語云廿五平維茂罰藤餘吾ハ前二人ヲ

走セテ澤膝カ有ラム所慥ニ見テ告ヨト

云テヤリタレハ其ノ使走返テ其ノ岳

ノ南面ニ沢立タル原ニ物食酒飲テント

テ或ハ卧シ或ハ病ム様ニテ有ト云ヘハ

餘五此レヲ聞テ喜テ疾ク打テト催ノ飛

フカ如クニシテ行ヌ其ノ岳ノ北西ニ馬

ヲ打上テ岳ノ上ヨリ南ノ下様ニ趣

ケタリ下様ナレハ馬場ノ様ナル野ヲ笠

掛ヲ射ル様ニ音ヲ叫テ鞭ヲウツテ五六

十人許押掛タリ

長門平家物語云清水冠者孫長門人經乃

うらふらふせうせう人としてかきつけ七ある

てまゝや免のまにみまらまははほもけ小

もあまらうらうらうやあうらんとて涙をた

さへく之後ハ多岐あり如所けき

吾妻鏡云建久六年七月廿九日辛亥早且  
渡御濱御所御遊興終日有御笠懸等又聞  
食管絃妙曲北條殿經營云々

太平記云四月三日合戦条 島津安藝前司是ヲ聞

テ子息二人手ノ者共ニ向テ云ケルハ日  
比聞及ヒ西國一ノ大カトハ是也縦  
ソ強クトモ身ニ矢ノ立又事有ヘカラス

縦ヒ走ル事早クトモ馬ニハヨモ追ツカ  
シ多年誓古ノ大笠掛今ノ用ニ立テスハ  
イツラカ可期イテハ不思議ノ一軍シ  
テ人ニ見セント云俟ニ只三騎打又ケテ  
四人ノ敵ニ相近付ク

嵯川親元記之文明十年七月七日下知笠掛

島山指小笠原信重書 殿同刑於少捕伊勢左

京左貞伊勢次郎貞頼伊勢七郎二郎貞頼和





とうりそ一いふんと射のとりて出るとなよ  
りも死うひそくを引直してのまゝ一回  
馬場の中へ入るとちあてて入とれとよそ  
るとまゝつづつ通り通してまゝかきり筆  
を始と後と貴殿へまゝ射中よの本  
まゝと子綱と二まゝ小かいくりまゝのかくうちま  
子綱と二まゝよの肉うけ同夫うまゝを  
肩よりかきまゝつづつと骨となく洗とぬ

ゆゑ事と二まゝと二まゝと二まゝと二まゝと  
一筋立と一筋のまゝ中へ練とす尻  
と志のまゝのまゝかきり射中よの本  
まゝかきりまゝつづつてりかきりまゝ  
極よくらまゝと一まゝかきり射中よの本  
養目と一まゝ中と一まゝ入りての身とまゝ  
ひまらちのまゝ一回まゝかきり射中よの本  
一こうてはかきりかきりまゝかきり射中よの本



一尺のかり貯わしたまふ

笠掛記云笠掛矢の法は事<sup>レ</sup>的<sup>ニ</sup>あり矢  
とありてま<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ありて<sup>レ</sup>的<sup>ニ</sup>より<sup>レ</sup>裏  
へ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>矢<sup>ニ</sup>つ<sup>レ</sup>て送<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>前<sup>ニ</sup>に<sup>レ</sup>落<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>矢<sup>也</sup>  
よ<sup>レ</sup>記<sup>ス</sup>矢<sup>也</sup>的<sup>ニ</sup>あり<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>繩<sup>ノ</sup>かり<sup>方</sup>  
矢<sup>也</sup>とり<sup>ま</sup>つ<sup>る</sup>る<sup>も</sup>一<sup>同</sup>多<sup>す</sup>ま<sup>す</sup>く<sup>矢</sup>つ  
と<sup>あり</sup>て<sup>ま</sup>す<sup>く</sup>と<sup>ま</sup>す<sup>く</sup>て<sup>あ</sup>る<sup>落</sup>る<sup>矢</sup>  
く<sup>ま</sup>り<sup>と</sup>て<sup>よ</sup>記<sup>ス</sup>矢<sup>あり</sup>同<sup>く</sup>た<sup>ま</sup>す

く<sup>ま</sup>す<sup>事</sup>と<sup>ま</sup>り<sup>る</sup>も<sup>矢</sup>前<sup>へ</sup>出<sup>て</sup>い<sup>り</sup>よ<sup>ま</sup>す<sup>矢</sup>  
也<sup>的</sup>あり<sup>て</sup>薪<sup>お</sup>き<sup>目</sup>そ<sup>く</sup>ら<sup>ぬ</sup>け<sup>い</sup>  
遠<sup>く</sup>ゆ<sup>き</sup>か<sup>し</sup>繩<sup>ノ</sup>かり<sup>ま</sup>つ<sup>て</sup>あ<sup>ら</sup>い<sup>り</sup>  
よ<sup>ま</sup>す<sup>あり</sup>引<sup>目</sup>の<sup>ま</sup>ぬ<sup>き</sup>て<sup>籠</sup>中<sup>也</sup>  
り<sup>ま</sup>す<sup>と</sup>ゆ<sup>く</sup>も<sup>的</sup>あり<sup>い</sup>り<sup>よ</sup>ま<sup>す</sup>矢<sup>也</sup>  
也<sup>な</sup>り<sup>よ</sup>り<sup>あ</sup>る<sup>矢</sup>い<sup>う</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>落</sup>る<sup>と</sup>も  
り<sup>ま</sup>す<sup>あり</sup>的<sup>あり</sup>る<sup>も</sup>ま<sup>す</sup>い<sup>矢</sup>  
り<sup>の</sup>事<sup>馬</sup>り<sup>り</sup>る<sup>も</sup>ぬ<sup>き</sup>ら<sup>と</sup>有<sup>る</sup>矢

とわらうしおくしうの的の着てたのちを  
にさうしをさす年よと名をさすしと名  
しうしうしうしうの事しうしうしうしう  
より後のくしうしうしうのしうしうしうしう  
まけてしうしうしうしうしうしうしうしう  
もすてへしうしうしうしうしうしうしうしう  
と引目しうしうしうしうしうしうしうしう  
よにさうしうしうしうしうしうしうしう



按筆掛は遠筆掛中筆掛の別ありし儀也  
よりしうしうしうしうしうしうしうしう  
陽末より遠しうしうしうしうしうしうしう  
馬場羊的の中は各の形しうしうしうしうしう  
詳あり併せしうしうしうしうしうしうしう  
筆掛的しうしうしうしうしうしうしうしう  
おしうしうしうしうしうしうしうしうしう  
なりたり又しうしうしうしうしうしうしうしう



新なるふよりく、筆押とつとをく方必  
承け侍りし所ありたりし、これと文字  
ふよりて附合せし事多うれ、これ持て考  
ふ

武家名目抄稿第一冊

*[Faint, illegible handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]*

武家名目抄稿繪圖

犬追物部



犬追物圖卷

射手具豆シテ未夕  
小予ヲ不指青袍之袖  
不納形也



弓小手ヲ指細ヲ  
留サスル躰也



紐留終前ヨリ  
見タル躰也



紐ヲ留後ヨリ  
見タル躰也



袖ヲ後ニテ  
納タル形也







弓手切馬手切共ニ  
押戻ハ繩ニテモ射也



先立物  
弓手  
筋違





筋違  
弓手  
身通

弓手身通





三子戴物



馬王四三子

漸達子子









馬手横物





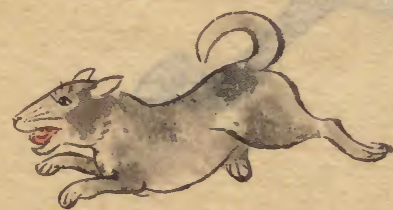


馬手筋遠  
當此不射天  
所也





馬手筋蓮  
不射矢所也



弓手遠物  
月影下





馬手遠物





鐘下弓午  
袖返十七



馬、兩足、間ヲ走通ル犬弓手ニテ射ル圖  
矢ニ入不入ハ檢見、心ニ依也





